

---

# 竜玉翡翠伝

L i l a c

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜玉翡翠伝

### 【Nコード】

N1726T

### 【作者名】

Lilac

### 【あらすじ】

アスイカ王国の幼き王女、リュシアは、国を敵国に滅ぼされ、大切なものを失い、独りになってしまった。人生の大きな転機を迎えたリュシアが出会ったのは、謎多き男だった。後にリュシアが師匠と呼んで慕う彼は、人と竜を繋ぐ『竜玉』の一つを持っていた。師匠と別れ、数々の神獣と出会う度成長する、気高き少女の物語…。

## PART 1 (前書き)

竜がいたらいいのに…という俺得な話です。いろいろ間違えた気がしますが、どうぞ生暖かき瞳で見てください。

## PART 1

「私を残して去りなさい。言った通りにするのです」  
嫌だ。離れたくない。

「いいから、早く」

何故離れなければならないの？

『去れ。小娘！』

竜が現れて、永久の別れが訪れた。

+++++

深い森の中を、何者かに追われるように走る何かがいる。

草をかき分け、躓きながら…。このたどたどしい走り方は、  
獣ではない。おそらく人だろう。

その人は、もう息が苦しくなっているようだ。だんだん走る速度  
が遅くなっていき、やがて歩くのもやっとになってきた。しばらく  
して、もう力尽きたのか、立ち止まってしまった。

身体は細く、旅用の服から覗く肌は白い。

しばらくすると、落ち着いてきたのか、その人は顔を上げた。

汗で濡れた、薄栗色の少しウェーブのかかった艶やかな髪を細い  
指でまとめて、小さく深呼吸する。

持ち前の直線的な眉をきゅっとひそめて、輝く空色の瞳で先を見  
据えた。

そう、この少女は独りでひたすら走っていたのだ。

何故独りなのだろう？それは少女本人も疑問に思っていた。

「姫様」

私、リュシア「ドラゴニアはかつて繁栄したアスイカ王国の王女

だった。

まだ幼くて、毎日が新しいものとの出会いだった。

まあ、由緒正しい王家なのだから、それは厳しく礼儀作法を教えられた。だから、当時はこんな生活つまらないと思っていたに違いない。

私は、何よりも母様が好きで、いつも一緒にいた。でも残念ながら、時がたった今ではあまり顔を思い出せない。きつと綺麗な女性だったにちがいない。

そして、一国をまとめる王である父様は、厳しいけれど誰より私のことを考えてくれていた。やはり母様と同じで顔をあまり思い出せない。

家族以外で慕っていたのは、王の親衛隊の隊長だったと思う。名前は：ガナー隊長だった気がする。誰よりも強くて、一緒にいて楽しかった。いつもリユシー姫と愛称で呼んでくれた。なぜかこの人は顔を覚えている。顔に剣で斬られた大きな傷があったから…。

本当にあの頃は楽しかった。何も恐れていなかった。

でも、その幸せは長くは続かなかった…。

## PART 1 (後書き)

ケータイで投稿するのは難しいです。間違いがあると思います。まあ頑張りますのでこれからもよろしくお願いします！

## PART 2 (前書き)

アスイカ王国で幸せに暮らす王女リュシア…。  
しかし幸せは長くは続かなかった…。

## PART 2

平和な日々には影が差すのは、本当にあつという間だった。

アスイカ王国は小さいが豊かな国で、よく周りの国から狙われていた。しかし、地の利を生かして戦う自慢の騎兵隊のおかげで、なんとか国を守れてきたのだ。

しかし、東の大国ダイランにかかれば、小国アスイカを攻略する事など簡単なことだった。ダイラン帝国が攻めてきたとき、アスイカ王国には為す術もなかった。

ダイラン帝国は当時勢いづいていた国で、小国をどんどん吸い込み、領地を広げていた。

アスイカ王国もその標的になってしまったのだ。

もうすでに美しい城は燃え始め、王の一族は僅かな兵と侍女だけを連れて逃げ出した。

リュシアは今になっても鮮明に思い出す。この日の悪夢を…。

7

父様も母様も、いつも陽気なガナー隊長でさえ馬を風のように駆けさせて急いでいた。

まさか自分の永遠だと思っていた幸せが、こんなに呆気なく遠ざかっていくとは本気で思っていなかった。どこかに残された希望があるはずだ、と子供らしいポジティブな考えで期待していたのだ。私は速駆けする馬に乗った母様に必死にしがみついている疲れをいたし、辺りは暗くなってきた、恐ろしかった。

もうすでに、沢山いた従者達は半数以上減ってしまった。

護られる立場の自分たちは、そのような従者達を見捨てて行かな

ければならない。見知った顔の人が知らないうちに消えてしまっただ。

精神的苦痛と肉体的苦痛が合わさって小さな私には限界がきていた。なにしろまだ10歳なのだ。

気のせいだろうか。微かに周りから馬の足音がする。周囲の大人たちも慌ただしくなる。

いつも冷静な母様でさえ今は硬い顔をしている。父様やガナー隊長と意味ありげな目配せをして、急に馬から降りた。

不安げな顔で見つめる私も母様は抱きかかえて馬から降ろした。すると、母様は私としばらく目を合わせ、笑顔で言った。

「リュシア…母様達はこのまま行きます。あなたはここでしばらくじっとしていなさい」

私は子供なりに察して何も言えなかった。でもどうしても訊いておきたいことがあった。

「また会えますか」

震える声で言った。今度は父様が、あの威厳のある厳しい父様が、優しく微笑んで答えた。

「会えるとも。だがずっと先だ。それまで、この私の娘だということとを誇りに、気高く生きてゆきなさい」

母様が背の高い草むらの中に食料や衣類など（服は変装のために粗末な男の子用の服だった）を上手く隠して、別の草むらに私を押し込んだ。

「よい人生を」

母様が囁いた。私はただその顔を見つめていた。

私だつて一緒に行きたい。

「生きなさい。独りを畏れてはなりません」

私の想いを母様は理解してくれているのだ。でも、突き放すように言い残して、馬に乗ってしまった。

ガナー隊長は厳しい顔で辺りを見回し、私に一礼すると、父様の

横に馬をつけた。

父様が静かに目を閉じて、深呼吸してから呟いた。

「行こう」

草が頭の上に被せられているので動くことはできないが、遠ざかっていく蹄の音は耳にうるさいほど響いた。もちろん心にも。

泣きたい気持ちだったが、泣くわけにはいかない。見つかってしまつし、一国の王女がそんなようではいけないのだ。父様の言葉を繰り返し思い出した。

母様達と共に行けば良かった。言葉に出来ないほど悲しい。でも、皆が遺してくれた希望を勝手に捨てることは許されない。

泣くのは止めよう。生きなければ、独りで。

ただうずくまって私は最初の独りの夜を過ごした。

## PART 2 (後書き)

ケータイ投稿ですので暇なときにちよくちよくアップします。しかし一回一回短いので、気長にお付き合いです。下さいます。

## PART 3 (前書き)

母と父と居場所と地位を無くしたリュシア…

失意の果てにリュシアが出逢うものとは…？

## PART 3

いつの間にか眠ってしまったようだ。改めて周りを見回すと、寂しさが胸に痛いほど沁みてきた。

よろよろと隣の草むらに向かい母様が遺してくれた食料や衣類などを小さくまとめて、ゆっくり立ち上がった。

確か母様達が馬で走り去っていったのは北東の方向だった。…できれば通りたくない。

私達は城から逃げて北へと向かっていた。ここからまた北へ行けば敵の思いつばかもしれない。

私なりに必死に考えた結果、ここから西へ向かうことにした。太陽を背にして歩けば元気が出そうな気がしたのだ。

ぎゅっと歯を食いしばって、私は最初の一步を踏み出した…。

立場上、今まであまり歩いたりしなかったリユシアは早くも疲れ始めていた。

道に終わりが見えないのだ。いや、道と呼んでいいものか分からない、鬱蒼とした森がずっと続いていて、足元もふらつき精神的にも参っていた。

幸い荷物の中にコンパスが入っていたので確実に西へ向かっていた。西へ行ったからといって、特に何かがあるか分からない。黙々と歩き続けた。

昼頃になって太陽が真上に昇った。春が近づいてきているので、暖かい。歩き続けてきたのでお腹がすいてしまった。立ち止まって座り込むと食料を取り出した。

乾燥させたパンや包みであるチーズを取り出すとまた寂しさが襲ってきた。

無言で食べ続け、水筒の水で流し込んだ。  
疲れた足を軽くマツサージして、さつきよりは元気に立ち上がった。

ゆっくり歩き始めたのだが、森に変わりは何も無い。そろそろまた退屈してきた。俯いてとぼとぼ歩くと、足元が明るくなってきた。思わず顔を上げると、目の前には広大な大地が広がっていた。そこには小さな村があった。

リュシアは思わず笑顔になって坂道を駆け下りた。

近くで見ると分かったのだが村はかなり小規模で見るからに貧しそうだった。それは今まで何にも困っていなかったリュシアでなくとも誰しもが思うだろう、というほどだった。

人家に行つて何をするかというところ、これから養つて貰えないかと頼みこむのだが、この様子だと無理そうであった。

しかしリュシアは人家を見つけ出した喜びでそんなことを考えるのを忘れていた。

緊張の面持ちでドアの前に立ち、ノックをした。

中から出てきたのは、小さな子供を背負った女性だった。

見知らぬ顔の自分を見たたん、思い切りドアを閉められてしまった。

他の家でもそのような反応をされ、今までそれなりに甘やかされてきたリュシアは、かなり傷ついた。

とうとう最後の家となった。ノックをして出てきたのは、老女だった。リュシアの顔を見て、一瞬驚いたが、リュシアに微笑みかけてくれた。

「まあ小さなお客様なこと。どうしたのかしら？」

やっと話のできる人がいた、とリュシアは思わず笑顔になりそうになった。

「あの…。私…家も家族も無くしてしまつたのです。どうか養つて頂けないでしょうか？」

老女は少し困つた顔をした。他の住民と同じく彼女も貧しい服を

着て、小さな家に住んでいたからだ。

「あなたを養いたいとは思わ。こんなに可愛くて、礼儀正しい。でも私にはあなたを養うお金が無いのよ…。この村の人々は皆そんなの」

「そうなのですか…」

がつくりするリュシアを見て老女は慰めるように言った。

「私の家の裏の山に、一人で住んでいる人がいます。その人はよく効く薬を作ってくださいたり、畑に撒くと良いものをくださるよい人です。その人なら弟子にしてくださいと言え、多分大丈夫でしょう。また困ったことがあったら私のところに来たらいわ。私に出来る限りのことをしますから」

この人の優しさにリュシアは感動した。希望が残ったのだ。

「ありがとうございます！」

そう言つてリュシアは足早に山へと向かった。

「あの人ならきつとあの子を養ってくださいさるわ」

老女は優しい目でリュシアを見送った。

老女に出会えたことは嬉しかったが、彼女の言っていた人はどんな人なのだろうと、不安が広がっていた。

とにかく山を登り、かなり高い所まで来た。もう夕方になって日は傾き始めていた。急いで走り出すと、開けた場所に出た。

そこには小さな家があった。しかし今までとは違い、小さいがしっかりした造りの家だ。

恐る恐る敷地に足を踏み入れて見ると、何か空間が変わった気がした。

「ここは…」

辺りを見回すと、1人の後ろ姿が目に入った。

その人は銀色の長い髪を肩で一度まとめ、腰までおろしていた。

かなり背が高いようですらっとしている。

「あの…」

声をかけると人影は振り向いた。

その人はとても不思議な雰囲気を身に纏っていた。切れ長の目の奥の瞳は金色で、軽く微笑んでいる口元は優しげだ。

一見男性かと思ったが、その表情がとても女性的で、性別はよくわからなかった。しかし身体を見ればなんとなく男性なのだろうと予想はついた。

「どうされましたか？」

声も穏やかで、落ち着いている。リュシアは緊張して答えた。

「勝手なことを申しますが、どうか私を助けてくださいませんか！？」

彼は形のよい眉をすつと上げて言った。

「私は別にいいですが、何をすればよいのですか？」

リュシアはこの人に話しかけられると、心がふわふわしてしまっ  
て焦ったが、しっかりと息を吸って声を出した。

「…私を弟子にしてください」

言葉と共に深く礼をした。すると、彼はリュシアに近づいてしゃ  
がんで視線を合わせた。

「わかりました。今からあなたは私の弟子です。名前は？」

意外とすんなり了解してくれた。少し嬉しくなって、張り切って  
リュシアは名前を言った。

「私はリュシア・ドラゴニアです」

言った後、リュシアはしまった、と思った。今時貴族階級以上の  
人でないと名字を名乗ることなど許されない。私の名字はアスイカ  
王国の王族にしか受け継がれない大切なものだ。しかも今は追われ  
ている身だ。

しかし、目の前にいる男は顔色一つ変えずに言った。

「いい名ですね。私には…名がありませんので、師匠とでも呼んでください」

さすがに今の時代でも名がない人はいないはずだ。

「え…？本当にないんですか？」

すると師匠は少し困った顔をした。

「…一族の人々には玉守たまもりと呼ばれていました。まあ気にしなくてよいですよ」

何を言っているかよく分からないが、リュシアはこの人の引力のようなものにどんどん引き込まれていった。また質問をしなくなつた。

「師匠は男の人なんですか？」

師匠はまた困った顔をして、しばらく考えてから答えた。

「顔とかは男ではありますが…どっちでもないんですよ…」

「…？」

またよく分からない。目を白黒させているリュシアを見て、師匠はくすくす笑った。

「まだ分からなくていいんですよ。そのうち分かるでしょうから」  
そして師匠は立ち上がり、沈みゆく夕日を見つめた。

「明日から頑張りますよ！」

「はい！」

この出逢いが後に自分の人生を大きく変えることになるとは、このときはまだ、リュシアは夢にも思わなかった…。

PART 3 (後書き)

師匠が現れました！

なんだか謎な人ですねえ！

ん？…デジャヴ？

キャラがかぶっ…？て…？

## PART 4 (前書き)

今回は暇な合間を縫ってやったのでなんかおかしくなっているかも  
…です。

すみません…。

師匠の謎に迫りますよ！

## PART 4

師匠の家は、質素だが丈夫な家具があり、なかなか綺麗だった。

「この部屋があなたの部屋です」

そう言っただけで師匠が案内してくれたのは、小さいが机やベッドがちゃんとある部屋だった。つい最近まで人が住んでいたような雰囲気がある。

リュシアがそう思ったのを、どうやったのか分からないが師匠は読み取った。

「たまに私の所には薬草の知識を学びにくる人がいます。あなたはこの山の前にいた老女に紹介されて、ここに来たのでしょうか？彼女も私の元弟子なのです」

あの老女はかなり年老いていたから山を登るのは無理だろう。若い頃に師匠に習ったとしても、かなり前のことになるのではないかな？師匠は見た目だけで判断すれば、20代後半だ。リュシアは、これはおかしいと思った。

しかし、その思考を遮るように師匠は言った。

「明日から薬草の採取の勉強をしますね」

師匠はそう言っただけで部屋を去ってしまっただけだった。

一人になると寂しさがこみ上げてきた。しょうがない、あれからまだ一晩しかすぎていないのだ。

じつとしていると気が滅入るので部屋を歩き回ることにした。

箆笥の中をしてみると、中には山歩きに適したような丈夫な服が入っていて、逃げる時はしょうがないと思っていたが、あまり地味な服を着たいとはリュシアは思わなかった。

王と王妃の間に生まれたたった一人の王女：それはそれは可愛がられ、誇りを持って生きるようにと厳しく育てられてきた。

それがたった数日で、何も持っていない惨めな孤児になってしまったのだ。

夜は静かに泣いて過ごした。

翌日、リュシアは目が真っ赤に腫れてしまった。しかし、師匠は何も言わず朝食を用意してくれていた。

「これからは朝食は自分で作ってくださいね。私の分は要りませんから」

「…朝は食べないんですか？」

師匠は顔色一つ変えずに言った。

「…基本的には朝も昼も夜も食べません」

「…え？」

師匠は意味深な笑みを浮かべた。

「何故かはまた暇なときに教えましょう。今日は忙しい、春なのですから」

すると師匠は席を立ち、支度を始めた。これ以上この事については聞き出せないようだ。リュシアは諦めて、現実を考えた。

「あの、私料理の作り方知らないんです…」

師匠は数秒間黙った後、こつちを向いて苦笑いした。

「…教えますから…」

ともかく今日のところは、薬草を採取しに行くことにした。師匠の腕は確かなようで、どこに何の薬草が生えているか、どうやって採取するのかすべて把握していた。

夕方になった頃には、もうリュシアは動けない程疲れていた。

「女性の嗜みとして武道にも励むべきだと思えますよ」

ぐだぐだに疲れるリュシアを見て、師匠は言った。

「今日は無理です」

師匠は慣れているせいか平気な顔をしていたが、まだまだリュシアは体力がついていなかった。

それから毎日、朝から薬草を勉強し、食事の時には料理の勉強を

し、夕方には武道を訓練し：毎日忙しかった。

でも必ず夜になると、鋭い悲しみが襲ってきて、どうしようもなかった。

母が言ったように気高くしていたのだが、独りになるとどうしようもなく寂しくなって、声を殺して泣いてしまった。

毎日朝は目が腫れているのが当たり前になってしまったのだ。

それでも師匠は何も言わないので、リュシアは逆に気を遣ってしまっ

た。生活の仕方に慣れてきたある日の夜、リュシアはやっと寝付くことが出来たのに、起きてしまった。

どうしてかというと、懐かしい匂いがしたからだ。それは高価な煙草の匂い：王がいつも吹かしていた煙草の匂いだった。

なんとなく居ても立ってもいられず、居間に向かってしまった。

見れば、煙草を煙管で吹かしているのは師匠で、頬杖について何か考えているようだ。

薄暗い蝋燭の炎に照らされた師匠の顔はどこか老けて見えた。

いつもは五感の全てが優れているはずの師匠が、遠いところを見ていてリュシアになかなか気づかない。数秒たった後、やっと師匠はリュシアに気づいた。

「こんな時間まで起きていたんですか？」

「どうしても眠れなくて…」

リュシアはここまで来てしまったのを少し後悔した。

「どうして眠れないのですか？」

リュシアは改めてよく考えた。この人を信用していいのだろうか。でも、悲しみを誰かに慰めて欲しかった。

「少し前のことを思い出すんです」

「独りになったときのことですね」

師匠は少し目を上げてリュシアを見た。

「師匠：私の考えてること分かるんですか？」

リュシアは師匠の瞳を見ていると、なにか心の中を見透かされているような気分になる。

すると師匠は一度瞳を閉ざして言った。

「ええ。あなたの生い立ちから何もかも。あなたはまだ子供だから読みやすいんです」

知らないうちに心を読まれているのは、とても気分が悪い。

「酷いです」

師匠はすまなそうな表情を浮かべた。

「すみません：しかしあなたの生い立ちが何であろうと、それを利用したりしません」

「じゃあ、私の生い立ちを師匠は知ったんですから、私にも師匠の生い立ちを教えてください」

師匠は少し驚いた顔をした。幼い子供は考えの展開が速いので、あまりついていけないのかもしれない。

「話、長くなりますよ？」

リュシアは気にしなかった。どうせ寝てもあの日の夢を見るのだから。

師匠は頷いて静かに語り始めた。

単刀直入に申しますと、私は竜なのです。質問は後で訊きます

から今は話を聞いて下さいね

竜は人の姿になれるのです。

その昔、この大陸に竜は一族で一カ所に住んでいました。私は、ある小さな一族の「玉守」として生まれたのです。

玉守はなにかというと、この世に2つしかない竜玉のうちの1つを護る役目のことなのですが、玉守には代々定期的に生まれる性別のない竜が選ばれるのです。

つまり、私のことです。

私は小さいときから人間に興味がありました。だから住んでいるところをよく抜け出したんです。

人間以外にも馬人や獣人など、辺境の地に住む生き物たちとも接触していたのです。

竜は：それを快く思わなかったのでしょうか。私は竜たちに行くなと言われても彼らに会いに行きました。

私は、竜の：高すぎるプライドが嫌いだったのです。人だからといって見下し、蔑むし…。殆どの竜が人について正しく理解していませんでした。

私は竜と人との絆を結ぶ、この竜玉を護る役目としてだけじゃなく、人のことをよく知りたかった。

そのうちに竜が人を理解しないように、人を庇う私のことも竜たちは理解しなくなったのです。

それでも私は反抗し、竜たちは手に負えなくなったらしく、私に罰を与えました。

竜の命とも言える翼を切り取られたのです。

竜は体が重いので、歩くことや泳ぐことは長く続きません。ですから翼がないということは、移動が殆ど出来ないということです。

ただ私は長い間、逃げることも叶わず生きていたのです。

翼を失ったのは：多分生まれてから2〜300年くらい後でした。それからさらにまた2〜300年くらい後：すみませんね、長く生きていると年数なんかどうでもよくなってしまうみたいですよ…。

話が逸れましたね。それからさらに2〜300年後に、竜狩りというものが人々の間で流行りだしました。竜の堅い鱗を求めて、人々が竜に攻撃を始めたのです。

だんだん竜の居場所がなくなってきて、竜たちは大陸から遠く離れた地へと飛び去っていったのです。

当然私は飛べないのでから、一族の竜たちが去っていくのを見ていることしかできませんでした。

しかし私はこれでやっと自由になったのです。

人の姿で長旅を続け今の地に辿り着きました。何故この場所なのかというと、一番親好が深かった馬人族の住む森が近かったからなのですが、それからずっとここにいます。

麓に住む人々は…気味悪く思っているんですが、私が長年培ってきた薬草の知識を無視はできないでしょう。竜とばれてはいりませんが、なんとかなっているようです。

「さて、もう遅い。私は疲れたので休みますよ」

師匠は小さく欠伸をした。鋭い犬歯が覗く。そして周りを片付け始めた。

『師匠は竜だったのか…』

リュシアはなんとなく納得できるような気がした。最初に見たときの不思議な雰囲気は竜がもつ力のようなモノだったのだ。

ふとリュシアは考えた。

『師匠は私以上に辛かったのかも…』

優しい顔の裏に、悲しい過去と、強い信念が隠れていたのだ。どんなに辛くても…。

「師匠：寂しかったんじゃないですか？」

師匠は振り向いていつもの笑顔を見せた。

「私は：人と共にいれればいいのです」

金色の瞳が光っている。

「そういえば…竜玉ってどんなものなんですか」

リュシアの質問に師匠はしばらく考えた。

「：若いつていいですね…元気で。見たら寝てくださいね」

そう言つて師匠は物置から箱を持ってきた。

古そうな箱だが丈夫そうだ。そういえばこの家には、古びていても大体使える物ばかりだ。その物のひとつひとつが不思議な力を帯びているような…？

リュシアはひたすら考えていたが、いざ箱が開くとなると、思考は中断された。

箱から出てきたのは、リュシアの顔と同じくらいの大きさの玉だった。

師匠が触ると、暗い世界に鋭い光が差しした。

そう、その色は輝く翡翠の色。溢れる碧が渦巻いている。

「これが…竜と人との絆を結ぶ…竜玉？」

師匠は小さく頷くと、竜玉から手を放した。

すると竜玉はだんだん光を失って、ただの透明なガラス玉になってしまった。

「触ってみてもいいですか？」

リュシアは瞳を輝かせて言った。

「あなたなら、大丈夫でしょう」

師匠はリュシアに竜玉を差し出した。

リュシアは小さな手で、竜玉に触れてみた。

少し温かくて滑らかな手触りだ。

リュシアがそう思った瞬間、竜玉が先程ではないにせよ、内側から光り始めた。

「やはり、そうなのですか…」

師匠が呟いた。しかしリュシアは我を忘れて魅入っているの気づかない。

「これを見たのは初めてなんですか？」

今度は、ちゃんとリュシアに話しかけた。

リュシアは首を横に振った。

「こんな綺麗なもの、見たことも聞いたこともありません」

「そうですね…」

師匠は意味ありげな表情を浮かべた。

何故師匠がこんな顔をするのか、幼いリュシアには知る由もなかった。

## PART 4 (後書き)

ああー長かった…！

予想ついていた人もいらっしやるでしょうね…。  
師匠は竜でした！

竜最高！

## PART 5 (前書き)

あらすじ

リュシアは師匠との生活の中で、師匠の正体を知る。彼は竜玉を護る役目を負った、玉守という竜だった。

## PART 5

師匠が過去のことを話してくれた日以来、師匠はリュシアが訊いたことは大体答えてくれるようになった。

例えば、何百年も生きているのになぜそんなに若く見えるのかということを訊けば、

「竜でも私くらいの齢になれば老いますが、私の場合竜玉の力で見た目くらいは若く保たれるのですよ。しかし、そろそろ動くのが辛くなってきました」

と苦い笑顔で返してくれたり、

なぜ食べ物を食べずにいられるのか、と訊けば、

「全く食べずにいられるわけではないです。ただ、竜には人の操る火で作られた物を食すことは…体に悪いというか…」

と少し悩みながら答えてくれた。

リュシアは師匠の下で学ぶうち、多くのことを学んだ。薬草についての知識はもっともだが、女性に出来る護身、料理（これについてはあまり上手くならなかったが…）、旅に必要な色々なことを師匠は教えてくれたのだ。

そして、リュシアが師匠から学んだことで一番印象に残ったことは…気高く生きる術のようなものだった。

それは師匠本人が直接教えてくれたわけではない。師匠の立ち振る舞いからリュシアが学んだのだ。

麓の人々に対しても涼しい態度で対応するし（リュシアはよく慌ててしまう）常に冷静だ。

何より、悲しく辛い過去があろうと、凜としてそこに立っている背中にリュシアが惹かれるものがあった。師匠のように気高く生きていきたいと思ったのだ。

リュシアはただ、そう思ったのだ。

朝目覚めると、眩しい光がカーテンの隙間から降り注いでいた。小さかったあの頃は、この部屋を普通よりちよつと小さいくらいだと認識していたが、今となってはもうかなり狭い。

肩甲骨の辺りまで伸ばした薄栗色の髪の毛は、自由奔放に跳ね上がっている、がリュシアはそこまで気にしなかった。見た目は気にしない。どんなに貧相な服を着ていようが、背筋を伸ばして生きればいいのだから。

リュシアはあの頃からずいぶん伸びた、しなやかな四肢を思いっきり伸ばした。

碧い瞳を晴れた空に向け、自室を出た。

国を去ってから季節は巡って六年の月日がたち、また春がやってきた。もうあの頃のように思い悩むことはないが、決して忘れもしなかった。

師匠が外に立って、白い鳥を手元にとまらせていた。表情が少し曇っている。

師匠は昔から、見た目は変わっていない。しかし体力がもたないのか最近はまだあまり動かず、疲れた顔をしている。リュシアはそこが心配なのだが、師匠はそのことについて何も口に出さない。

簡単に料理を作って、手早く食べ始めた。今日は忙しい。今の時期薬草は沢山あるし、麓の村まで加工した薬を持っていかなければならない。こうして日々薬を届けることで、村人とも親しくなれた。倉庫に行つて薬草を入れる籠をとりに行くと、丁度師匠と出会った。

師匠は何か言いたそうな、しかし、言いにくいようなことを言うようにしている表情でそこに立っている。

「師匠？」

リュシアが師匠の顔を見上げると、師匠は重々しく口を開いた。

「ダイラン帝国がこちらの方向に攻めてきているようです」

リュシアはハツとした。体からサアツと血がひいていく。

ダイラン帝国はアスイカ王国を攻めた後、自国の守りの強化を始めていて、しばらく西へは攻めてこなかった。ダイラン帝国の東の小国の反抗が続いたからだ。

師匠はどうやってそんなことを知ったのだろう。とにかくリュシアは立ち尽くしているしかなかった。

「危ないですからもうここを去りなさい。逃げられるうちに」

師匠は厳しい顔で言った。

「でも、師匠は…？」

今の言い方では師匠一人がここに残る、と言わんばかりである。

師匠はリュシアを真っ直ぐ見て微笑んだ。

「私は、逃げる必要はありません。もう十分生きたのですから」

「そんな！いやです！」

まだ言いたいことはあるのに、師匠は無言で制した。

「…私は竜玉を次の玉守に渡すまで生きていようと決めていました。しかし今となつては体力もなく私の一族がいる島に行くのに海を越えることなど到底無理です。ですから、考えあぐねていました。そこにあなたが現れた」

深い金色の瞳は不思議な光を湛えている。この瞳を見るとリュシアは何も言えなくなってしまう。戸惑うリュシアを気にせず師匠は続けた。

「リュシア＝ドラゴニア、あなたは竜玉に触れることが出来た。それはあなたの一族に伝わるもう一つの竜玉と関係があります。竜玉は決められた者しか触れることができませぬ。私のような玉守と、アスイカ王国の王族です」

「何ですか？」

「ここに来るまで一度も竜玉のことは聞いたことがない。」

「人は命が短いから、歴史は忘れられやすいのですね。」

「太古の昔、人と竜は共に生きていました。しかし種族が違うとなかなか親しくはならなかったのです。人々は竜を畏れ、神とあがめていたのです。」

そんなとき、竜の中でも最も神に近いと言われていた竜が、人に恋をしたのです。その頃はまだ竜は人の姿になる術を知りませんでした。その竜…彼はその術を見つけ出し、その美しい人と共に生きたのです。」

しかし、人の命は短い。彼女が早くして亡くなってしまった時、竜は世を憐んで自ら命を絶ちました。彼がその時自らの力を自らの瞳に吹きこんだのがこの竜玉なのです。」

一つは何故か定期的に生まれる性別のない竜に、一つは彼と人との間の子供に、その子孫は後にアスイカ王国を建国するのですが、そうやってここまで続いてきたのです。」

師匠は長く喋って疲れたのか、壁にぐったりと寄りかかった。

自分の一族の起源はそんなところにあつたのかと思うと同時に、疑問が浮かんできた。

「何故、何のために竜玉は遺されたのですか？」

「彼は人と竜との将来を心配したのです。これから双方の関係がなくなってしまうのではないかと。お互いに憎み合い、争い合うのではないかと。だから自分の強い力を込めた竜玉を人と竜に託したのです。竜玉の力を使えるのはお互いの気持ちは合わさっている場合です。竜玉の力は人と竜との絆を結ぶこと、力を使えば何かが変わると言われています。もし竜玉を持っている者達同士が争えば、竜玉が双方の力を吸収する仕組みになっています。」

「つまり、重要なモノだと…。」

師匠は小さく頷くと、壁を伝って椅子に座った。

「ですからあなたは…昔の私の知り合い…馬人族や獣人族、『鳥』」

に手伝わってもらって竜がいる島に向かうのです。そして玉守に竜玉を渡し、竜と共にもう一つの竜玉を探すのです…それが私の頼みです。リュシア、あなたのお陰で楽しい日々を過ごせた」

こんなに弱っている師匠を見捨てて私は逃げるのだろうか…リュシアは茫然とした。

師匠に竜玉を渡されたが、翡翠の輝きを放つ竜玉は幼い頃に触った時より重々しく感じた。

「これでは同じです！何故皆生きる希望があるのに、残された者の気持ちも考えず居なくなってしまうんですか！」

『父様も母様も皆…』

師匠は何も返事をしない。リュシアは悔しくて歯を食いしばった。何もしないのは嫌なので、自分と師匠の分の荷造りをした。素早く旅に必要な物を詰め、外に置く。

そして無理やり師匠の手を取って外に出た。

「嫌ですから！一緒に行きますから！」

しかし、師匠はその場を動かなかった。

「師匠…」

「私には体力がありませんよ…。それに私の頼みが聞けないのですか？…別れを越えてこそ、本当に強く、気高くなれるのですよ」

その言葉はリュシアの心に痛いほど響いた。涙が流れそうになる。『涙なんか流したら…永遠の別れみたいになっちゃうじゃない』

すんでのところで我慢した。

強情なリュシアを見て、師匠は仕方ないなという顔をした。

「私と共にいてくれてありがとう。お願いですから、行ってください」

受け入れるものか！

師匠はとうとう強行手段をとるしかなかったようだ。口調を強くする。

「私を残して去りなさい。言ったとおりにするのです」

ためらうリュシア。一方師匠は切れ長の瞳を更に鋭くして叫ぶ。  
「いいから、はやく！」

嫌だ。離れたくない。何故離れなくてはならないのだろう。  
リュシアは師匠の強い口調に戸惑った。とり乱しそうになった。  
その隙を衝かれたのかもしれない。

世界は白い光に包まれ、眩しさでリュシアは目を閉じてしまった。  
光が収まり目を開けると、目の前には竜がいた。

堅く鈍い銀色の光を放つ鱗が体中にびっしりとあり、牙や爪は大きく鋭い。目だけでも人の頭の大きさがあるかもしれない。金色の瞳は怒りに燃えていたが、その奥に何か悲しく暗いものを感じた。  
翼のない竜は低い声で咆哮を上げた。まるでこう言っているかのように…。

『去れ。小娘！』

リュシアは正直何をすればいいか分からなくなった。ただ、パニツクに陥って…目を白黒させていた。

目の前の竜が師匠だということを忘れてしまった。

ただ、竜から逃げたいという一心で荷物を持って逃げてしまった。

何故なのだろう？それが竜の力なのか？

太古の昔、人が畏れた竜とはそういうものだったのだろうか…。

我を忘れて走り続けたリュシアは、森の中を必死に走った。

ふと我に返って立ち止まると…知らないうちに一人になっていた。

何故…私は独りなの…？

どうしてだったかな…？

心に兼食つ虚しさと悲しみは…ロシアの気持ちを過去へと誘っていった。

## PART 5 (後書き)

最初と最後が繋がりました

良くも悪くも竜なのです

一気に書いたので疲れました…  
内容も…疲れる内容です

次は師匠が言っていた『鳥』の正体が明らかになるかと…

お楽しみに！

## PART 1 (前書き)

師匠と別れ独りになってしまったリユシア  
彼女が出会う不思議な人物？とは…？

## PART 1

過去を思い出すうちにリュシアの心には怒りと悲しみが渦巻いていた。

逃げ出してしまった自分への怒り、あそこまで頑なに生きようとしなかった師匠への怒り。

そして、独りになってしまった悲しみ。

冷静になってよく考えてみれば、師匠はあれだけ嫌っていた竜の姿をさらけ出してまでリュシアを追い出そうとしたのだ。それに、師匠にはそんなことをする体力はあまりないことをリュシアはよく知っている。

辛いのにそこまでの強い思いがあったから。ここで引き返せば逆に師匠を苦しめることになる。

リュシアは決心した。

師匠の意思を継ぎ、竜玉を竜に渡すために頑張ろう、と。

まずは師匠の言うとおり、馬人族のいる森に向かうことにした。

一日中頑張って歩けばとどく距離だが、我に返って過去を思い出すうちにもう暗くなり始めている。

傍らに誰もいない寂しさが、胸に風を吹かせる。

心細く思った瞬間、どこからかガサガサツという音がした。

人が獣か分からないが、どちらも厄介だ。リュシアは短刀を持って構えた。護身を習っていたといっても、もし男と戦うのであれば、勝つ見込みはほとんどない。逃げるための護身だ。

緊張が張り詰めている。すると、ガサガサツという音が急にとまった。

「構える必要はありません」

どこからか少年の声が聞こえる。上だ。

リュシアが見上げると、樹の上に白い人がいた。

白いダボツとした服を着た、純白の髪の少年……。髪には沢山の飾りがついていて、キラキラしている。白いまつ毛の下の瞳は漆黒で何を考えているかわからない。目の下にあるのは翼の形の刺青だ。

表情は無邪気か邪悪か分からないような笑みを浮かべている。

そしてなにより目をひくのは背中にある純白の翼。鳥の翼だ。

『鳥……？』

リュシアの心に鳥という言葉が引っかかった。確か師匠も鳥と言っていたような気がする。

すると少年は明るい声で自己紹介した。

「リュシア、ドラゴニア様、人の姿では初めて御目にかかります。

私、竜の使いを勤めている、『鳥』と申します。何しろ鳥目なものですから下には降りられません、ご無礼をお許してください」

そついうと鳥は恭しく頭を下げた。

「本当に鳥という名前なの？」

別にそんなことは気にしたことがない、とでも言っているかのように鳥は首を傾げた。本当の鳥みたいだ。

「竜様のお力で人の姿になっていますが、もとはただの鳥です。だから名前も鳥」

にやにやと笑いながら言う。

なんだか信用していいのか否か迷う。

「玉守様のご命令であなたの旅のお手伝いをさせていただきます」

もしかしたら師匠とよく一緒にいるのを見かけた、あの白い鳥は彼なのかもしれない。リュシアはなんとなく思った。

「では早速…。風の噂によると、竜ほどではないにせよ、馬人族は人を警戒しているようですよ」

決まり文句を言うように自信ありげに鳥が言う。

「じゃあどうすればいいの？」

「そんなことはご自分でお考えください。お嬢様のそういうところ、玉守様も心配してましたよ」

鳥が師匠のことを喋るのは胸糞悪い。それに鳥は竜に使える身であって、人などに敬意を払う気持ちもないくせにわざとお嬢様などと言うのでさらにリュシアはイライラした。

「わかった。自分で考えるわ！もう用はないでしょ？じゃあね」

鳥は白い眉を少し上げると、目は笑っていない笑みを浮かべて言った。

「お気をつけて」

それも無視してリュシアはずかずかと歩き去った。

鳥との出会いがリュシアのこの先への不安をさらに募らせた。

## PART 1 (後書き)

鳥との出会い編終了です。

鳥は嫌なやつですね。

私は未熟ですので性格のねじ曲がった生き物がどうしても上手く書けないので、珍しいキャラだと思えます。

次は馬人族との出会いです。お楽しみに。

## PART 2 (前書き)

個人的に鳥を登場させたくて、無理やり入れちゃった気がします…

前回のおさらい

師匠のところから離れて独りになったリュシアが出逢ったのは、ミステリアスな人の姿をした鳥だった…

## PART 2

鳥のいた所からしばらくリュシアは歩き続けた。

広がる不安とともに世界は暗くなっていく。野宿するしかない。親と離れたときもこのような感じだった。歯を食いしばりながら寝る場所を確保し、嫌でも少しは乾燥させたパンを口に含んだ。どんなに気持ちが悪く沈んだときでも、倒れてしまっただけは元も子もないので、食べるしかない。師匠から教わったことはちゃんと自分に生かされていると実感して、また切なくなつた。独りは辛い。しかしどんなに辛くとも、朝は必ずやってくる…。

チュンチュン…

小鳥の声…。朝だ。

『そういえば「鳥」は自分を鳥だと言っただけで、本当に鳥なら多分こんな綺麗な声は出せないだろうな…』

そんなことをぼんやり考えながら、リュシアはゆっくり身を起こした。寝た環境の悪さで発症した頭痛と、気分のだるさに耐えて昨日の残りのパンをかじる。

これから行く地帯には人が寄り付かないので村などは少ない。ここから先は獣や得体のしれないモノたちが跋扈する地になるのだ。

馬人族の住む森までは暗くなる前に着けるだろう。師匠とよく親交があつたらしいので話が出来ないわけではないだろう。

不安ばかりを募らせても仕方がないので、リュシアは道のりを急ぐことにした。

+++++

『馬人族は話せば分かる相手ですが、頭が固くて大変でしょうね』  
木の上で頼杖をつきながら、鳥がリュシアを観察している。  
そして、チュン！と小鳥の声で鳴いてみた。  
それでも気づかないリュシアを見て、鳥はまた不気味に笑うのだ  
った…。

+++++

まだ昼だというのに森の中は暗い。人の手の入っていない、原生林らしい薄暗さや不気味さが周りに漂っている。人間より強く大きいモノが住んでいるような…。

怖いんだけど進むしかない。意外に早く馬人族の住むという森に着いたリュシアは足を元を気にしながら歩き始めた。

しかし、どこまで行ってもうんざりするくらい変わり映えのしない森に、リュシアは不安と苛立ちを隠せずにいた。慎重だった歩みもだんだん荒いものになってきた。がさがたと無粋な音が森にうるさいほど響く。

それが好くなかったのかもしれない。リュシアの周りには、静かに何かが迫ってきていた。リュシアがそれに気づいたときにはもう遅かった。

「止まれ、人間」

リュシアを囲むようにそびえる高い影達は、厳しく言い放った。

そして、黒曜石でできた原始的な槍を一齐に構える。

6人ほどいる影達は、皆上半身に簡素な革でできた鎧を纏い、下半身は…馬の体だった。

『男の馬人族だ…』

リュシアは師匠に教えてもらったことを思い出した。

馬人族とは、森に住み、森に生きる神獣達や樹木、水などを崇め護る役目を持った者達だということ。そして上半身は人間、下半身は馬のようになっていてという異色の生き物だということ。

気が荒いということも教わっていたので、リュシアは恐ろしさでびくびくしながら彼らなるべく怒らせないように、敵ではないことをアピールしようとした。

「私は…森を荒らそうとして来ているわけではありません。皆さんにお話があつてきているのです」

しかし馬人族は動じない。漆黒の毛並みをもった馬人が噛みつくように言った。

「そなたは十分に森を荒らしている。騒がしい音を立てて森に侵入したときから、木々が怒りの木霊を送り、神獣様にお伝えしたのだ。母なる森が人間に穢されていると！」

この馬人の鎧にいくらかの飾りがついていることから、一番位が高いことが分かる。リュシアは城にいた気位の高い馬のことを思い出した。その馬が名馬だったのと同じく、この馬人も、力強く輝く紅い瞳がある勇ましい顔立ちに逞しい上半身、よく締まった馬の身体がよく目に付くような素晴らしい体躯だった。

「森を荒らしたことは謝ります、ですから話を聞いてください！」

こんな強そうな生き物に襲われたら死んでしまう。リュシアは焦りながら謝った。

しかし馬人族は蹄で地面を打って批判の意を表した。なかには槍をしっかり構える馬人もいた。

目に涙を浮かばせながらリュシアは懇願した。死にたくない。

「竜玉を持っているのです！どうかお話を！」

懇願するリュシアを鼻で笑って、馬人族は槍を今にも刺すように構えた。

『もう駄目っ…!!』

リュシアがそう思った時、美しい声が辺りに響いた。

「おやめなさい」

穏やかで美しい、笛の調べのような声だ。

それが聞こえた途端、馬人族は構えを解いた。そして森の奥を見つめる。高い草が揺れて、そこから出てきたのは、眩しいほど白く輝く毛並みを持った女の馬人だった。

漆黒の瞳は悲しげに揺らいでいて、露を含む花のように美しい。腰まで伸ばした白い髪は三つ編みにして、馬の鬣のように余った髪が首に巻きついている。身につけている物は男の馬人とは違い、薄手のやわらかい物だった。

そして何より目を惹いたのは、その馬人の額から生える螺旋状の筋の入った真珠色の角だった。

見惚れているリュシアを見て、その馬人は微笑む。しかし先程の漆黒の毛並みの馬人は不満そうに意見した。

「ウエン様！何故止めるのです！？この者は森を穢しているのですよ！」

ウエンと呼ばれた馬人はそんな文句を物ともせずにもた微笑んだ。「相手の話はちゃんと聞くべきだと思います。貴女は本当に竜玉を持っているのですか？」

優しく話しかけられてリュシアは少し戸惑ったが、ちゃんと荷物から薄く光る竜玉を取り出した。

「何故人が持っているのだ？玉守様が護っていらつしゃったのではないのか？」

「盗み出したのではないのか」  
そういったどよめきが起きたが、ウエンが片手で制した。

「竜玉は持つべき者しか触れることが出来ない筈です。触れているということは、彼女が持つべき者なのでしょう。しかし何故人が持つべきも一つ一つの竜玉のほうではなく、玉守様の竜玉を持っているのですか？」

ウエンは責めるようにはなく、優しく訊いてきた。リュシアは、素直に自分が師匠と出会った経緯や師匠が竜の地に竜玉を返して欲しいと自分に頼んだことを話した。

何人かの馬人は文句を言っていたが、ウエンは小さく頷いて理解

してくれた。

「それならここで竜について教えてあげられるかもしれない。私も小さな頃はよく玉守様とお話をしましたから」

「ありがとうございます」

他の馬人達、特に漆黒の毛並みの馬人は快い顔をしていなかった。しかしウエンはその馬人に向けて微笑んだ。

「ライア、人だからといって疑っているばかりではいけないわ」

ライアという名の、漆黒の毛並みの馬人は、しかし…と呟きかけたが、ため息をついてウエンに同意した。

「ウエン様の仰せのとおりにございます」

すると今度は、律儀に頭を下げるライアを見てウエンはため息をついた。

「私も貴方も同じ馬人でしょう？なんで昔みたいに仲良くしてくれないの？」

ライアは表情を動かさずに答えた。

「ウエン様は神獣、森、水に最も近い存在でいらっしやいます。私などとは格が違いすぎます」

それはウエンが角の生えた真っ白の姿をしているからだだろうか。

そのように言われてウエンは悲しそうに眉をひそめた。しかし悲しみを振り払うようにきつと顔を上げると、リュシアに静かに言った。

「ついてきて下さい。まずは我らが崇めている神獣さまに挨拶をしに行きましょう」

一瞬先程の馬人族たちのような頑固な生き物を想像したが、意を決してウエンについていくことにした…。

## PART 2 (後書き)

キャラの名前とか何となく決めるんです…

だからどこかかぶっている可能性大です…

眠くなりながら作ったのでおかしいですよ…

男の馬人、女の馬人…とか表現方法訳分かんないですね…

かぶってたらごめんなさい…

## PART 3 (前書き)

更新遅くなりました！  
すみません…

前回のおさらいをしますか！

無事に馬人族の森に着いたリュシア  
しかし、人間を警戒する馬人族に囲まれて、危険な状況になる  
ピンチのリュシアを助けてくれたのは、ウェンという白い馬人だっ  
た

### PART 3

ウエンは鬱蒼とした森をゆつくりと進む。その横にライアがついて、たまにちらちらとリュシアをうかがっている。

馬の脚ならもっと早く進めそうなものだが、ウエンの長い角が邪魔をしてなかなか進めないようだ。

しばらくすると森はどんどん明るくなり、無駄な草木が生えない、手入れされたような森になった。

「ここは神の森。手入れしなくてもこのようになるのですよ」

ウエンが静かに言う。

『思ったことを読まれた！？』

竜と同じく馬人族も読心術のような能力があるのだろうか、とリュシアが思った瞬間、ライアが口を開いた。

「ここは静寂の森。そなたの『声』は大きすぎるのだ。木々もざわめいて落ち着かない」

その言葉通り、木々は風もないのに揺れて、まるで話し合っているようだった。

「まあ、このお陰で我々が来たと神獣様にわざわざ伝える手間が省

けました」

ウエンがそう呟くと、地鳴りのように地の底から響く音が聞こえた。近づくにつれ、目に入ってきたのは、不思議な生き物の群れだった。

その体はまるで馬のような形だったが、竜のような鱗で覆われていた。奇妙に曲がった関節から伸びる脚の先には蹄はなく、厚みのある鋭い剣のようになっていた。瞳には生き物らしい温かみを感じられないし、身体中が鎧のようなので、荒い呼吸音でやっと生き物なのだと確認できた。

「この生き物が…神獣様…」

リュシアは納得できるような気がした。どことなく、竜に近いその姿が神聖さを表していたからだろう。

ウエンがゆっくりと神獣達の群れの中に入り、何か話しかけていた。

「我ら馬人族でも、神獣様に近づくのは恐れ多いことだ。しかしウエン様は違う。真に神獣様のお心を読むことができる…」

そう言ったライアの眼差しは憧れや羨望の意味以上の感情がこめられているようにリュシアは思った。

「神獣様にお許しをいただきました。晴れて貴女も我ら馬人族の客人です」

神獣達の群れから離れながらウエンが言った。そして神獣達は、

一気にこちらに対する興味を失ったらしく、足早に去っていった。

ウエンはまた来た道を戻り、しばらく歩いた。

すると、なかなか大きな広場があった。暗い中で何人かの馬人達が食事をとっている。

馬人は雑食らしく、森の木の实やキノコが肉と一緒に焼かれている。燻された川魚の切り身等も吊されている。この森の豊さが目に見えるようだった。

リュシアが感心していると、1人の年老いた男の馬人がやってきた。身体の装飾品が多く、顔に施された刺青が特徴的だ。恐らく、位の高い馬人なのだろう。

「人間。私はこの森の馬人族の長じゃ。ウエンから事情は聞いておる。そなたはもう我らの客人じゃ。」

リュシアは長に勧められ、肉や木の实を食べた。素朴だが、なかなか美味だった。

馬人達のリュシアに対する態度はよそよそしかったが、常にウエンとウエンを護るライアがそばにいたので、安心できた。

食事をすませた馬人達は酒を飲んだり、楽器を演奏し始めた。

ウエンも木製の横笛を取り出し、優しい音を奏でる。

『素敵な音楽…』

リュシアは心が温まる気がした。きつとこのような音楽を奏でることが出来る馬人族は、素晴らしい一族なのだろうと思った。

リュシアのところにも酒の壺が回ってきた。勧められたものを断るつもりはなかったので、リュシアはいただくことにした。

酒は果実や虫達が集めた花の蜜でできたもので作られていて、飲んだ瞬間、甘い香りと味が口の中に広がった。

宴も終わりが近づき、リュシアもかなり眠くなってきた。疲労と酒のせいだろう。

「リュシアさん、もう夜も遅いですし、お話は明日にしましょう。寝床は用意してありますから」

「…すみません…かなり眠くなってきました…」

リュシアの言葉にウエンは微笑むと、リュシアをハンモックまで連れて行ってくれた。

「私達馬人族はハンモックを使いません。これは玉守様がよく使っていたらっしゃった物です」

リュシアは眠すぎて意識朦朧としていたので、ウエンの言葉を夢現に聞いていたが、心に温かみを感じながら眠りについたのだった…。

そして朝になった…

リュシアはパツと目を覚ました。もう辺りはすっかり明るくなっていた。

ハンモックから降りて、夜の間を持ち物を盗まれたりしていないか確認するために、リュシアは寝返りをうって、降りようとした。

「きゃっ！！」

寝返りをうったら目の前に、『鳥』が立っていた。

相変わらず、何かを企んでいる顔をしている。

「きゃーはないでしょう？私、夜中ここの警護をしていたんですからね」

鳥に弱みを見せてしまった気がして、リュシアは恥ずかしいのと怒っているのとで真っ赤になった。

「そんなことは頼んでないわ！」

鳥はわざとらしく驚いて、恭しく頭を下げた。

「誠に申し訳ありません…安全に竜玉を届けたいのです。竜玉に何かあつてはいけないのです。鳥目にしては頑張っているのです」

鳥はわざとかはわからないが、リュシアのためとは言わず、竜玉を護るためだと言った。何となく癪に障る言い方だ。

「そんなに竜玉を早く届けたいなら、自分が持って行けばいいじゃない」

リュシアは投げやりに言った。そんなリュシアを見て、鳥はまたニヤニヤと笑う。

「それは無理ですよ。竜玉はリュシア様と玉守様にしか触れられないのですから。それに、竜は長生きですから、特に細かいことは気にしません。長くても、リュシア様が死んでしまふ前に届けていたきたいのですよ」

鳥はリュシアを怒らせに来たのだろうか。それくらい失礼だ。

「…もういいよ…どこかにいって」

いくら怒ってもキリがないとリュシアは悟った。

「…あっ！忘れてました。風の噂に聞いたことをご報告しようと思っていたのです」

鳥はリュシアがどれだけ不機嫌か全く理解してないような明るい口振りで言った。

「風の噂によりますと…ダイラン帝国は東へ向かったようです。こちらには向かってきていません」

「じゃあ、前に師匠に伝えた情報は嘘だったの…?」

鳥は横に首を振る。

「東に予想外の動きがあったのです。ダイラン帝国より東の小国群が連合軍を作り、ダイラン帝国を攻めようとしているのです」

リュシアは、不謹慎なだけけれど、安心してしまった。師匠が気になっていたからだ。

「では…」

「知りません。リュシア様が玉守様と別れた日以降、玉守様は私含め、竜族関係者の来訪を禁じているのです…お役に立てなくてすみません」

リュシアがまだ言わないうちに鳥は返事をした。しかし、今度はかりは、本当にすまないと思っっているようだった。

「師匠…」

リュシアは逃げるように師匠のもとを離れてしまったことを激しく後悔した。もっと長く一緒に居られたはずなのに。

「リュシア様：出会いがあれば、別れは必然…それに…玉守様の願いを叶えることが一番玉守様のためになると私は思うのです」

リュシアはため息をついた。本当に鳥の言ったとおりだと思っただけ、過去ばかり見ている、今は目の前のことに集中できていないのだ。

「…悔しいけど…鳥の言うとおりね…」

鳥はいじらしく笑う。

「悔しいけど…ですか？ふふふ…まあ、悩んでいる暇はないですよ」「また急かすつもり？急ぐ必要はないとか言っときながら…」

まともな事を言ったとはいえ、リュシアは鳥が苦手だった。苦い表情のリュシアを楽しそうに見つめながら鳥は言った。

「違いますよ？もう太陽はだいぶ上っているのです。馬人族の朝は早い。私も一旦ここを離れましょう。…では」

次の瞬間、強く白い光が世界を覆い、リュシアは目を閉じた。

目を開けた時には鳥はいなかった。

急いで空を見上げると、確かに太陽は真上に近いところまで上っていた。

そして、小さな白い鳥の影が見えた気がした。

### PART 3 (後書き)

今回から読みやすいように、間を開けて書いています(8/28)  
これから気が向いたら、過去の小説も読みやすく編集したいと思  
います

お気づきでしょうか

また鎧馬が…登場ですww

使い回s…

ではないです多分

好きなんです鎧馬

ではまた次回でお会いしましょう…

閲覧ありがとうございますとございましたとっっても真面目

## PART 4 (前書き)

前回のおさらい

馬人族の客人となったりユシア。馬人族と宴をし、眠りについた。夜中警護してくれていたのは鳥で、戦の状況について風の噂を伝えてくれた。

しかし、それで朝はどんどんすぎていき…

久しぶりの更新…

## PART 4

急いで身支度をしたリュシアは、昨夜夕食をとった広場に戻った。

昨夜の喧騒が嘘だったかのように、広場は静まっていた。

「寝坊しちゃったんだ…」

「そうだな。人間とはこんなに怠け者なのだな」

急に隣からした声に、リュシアは驚いて、声のした方を見た。

そこにはライアが厳しい顔をして立っていた。上から冷たい目で睨んでくる。

「すみませんっ…寝坊してしまって…皆さんは何処へ行かれたのですか？」

リュシアは威圧的なライアの態度に少し恐れを感じて謝ったが、ライアは眉一つ動かさなかった。

「皆は狩りに出かけている。当たり前だ」

「そ…そうですね…」

気まずい雰囲気あたりを漂う。リュシアは我慢できなくなって、何か喋ろうと思ったが、それはライアに遮られた。

「役に立たない者に飯を食わせるわけにはいけない。ウエンは別にいいと言っていたが、私はそうは思わない。だから、お前には仕事をしてもらう」

『ん…？今…ウエン様を呼び捨てにした？』

リュシアは少し気になったが、ライアは気にしていない様子なので、聞かなかったことにした。

「…何を考えている？…とにかく、そなたにはこれを作ってもらおう」  
リュシアの心を読もうと、ライアが訝しげに彼女を見つめながら、黒曜石を差し出した。

「これは…？」

「槍や弓の刃にする黒曜石だ」

ライアがリュシアに見本を見せた。見事な鋭い刃先が鈍い光を放っている。

「作り方が分かりません…」

「教えてやる。使えないものを作られても困るからな」

そう言うと、ライアは作業台のようなものが集まる一角にリュシアを連れて行った

高めの台の上には、獣骨や木槌などが並べられていた。

「まずは、木槌を直接打ちつけるのではなく、黒曜石の一端に骨のタガネを当て、槌で間接的に打撃を加えて石片をはぎ取る…コツがいるが、やっているうちになんとかなるだろう」

ライアが説明しながら黒曜石を加工していく。いとも簡単そうにやるので、リュシアは早速作ってみることにした。

…しばらくして…

「あーっ！まただ…もう無理っ」

森にリュシアの嘆きが響く。

「五月蠅い。黙ってやれ！」

ライアは怒気を込めた声で喋ってはいるが、手際は恐ろしくいい。リュシアの失敗した欠片を上手く加工してくれている。

「全然上達してないな…。ウエンより不器用なんじゃないか」

本人は気づいてないかもしれないが、ライアは小さく呟いた。

「ウエン様って不器用なんですか？」

リュシアは少し気になったので、思わず訊いてしまった。すると、ライアはリュシアの前で初めて慌てた様子を見せた。

「き、聞こえてたのかっ！？それは…その…！違っんだ…！」

「何が違うんですか？それに何で呼び捨てなんですか？」

ライアの反応が面白くて、リュシアは思わずいろいろ質問してしまっただ。

「調子に乗るなっ！人間！」

ライアは先程リュシアが出した大声より大きく叫んでしまった。森の小鳥が飛び立つ音がする。

その後は、気まずいほどの沈黙が続いた。

やがて、太陽が天頂から少し傾いた頃、やっとリュシアは全ての黒曜石の加工を終わらせた。

台の上の片付けをしていると、ウエンがどこからかやってきた。

「ライア、怒鳴り声が神獣様の森にまで届いたわ。まるで小さい頃に聞いた長様の怒鳴り声みたいに」

ウエンはよほど面白かったのだろうか、くすくす笑いながら寄ってきた。

「うる…じゃなくて、すみません。神獣様もお怒りでしょうし、狩りもきつと上手いかなかったに違いない…誠に申し訳ございませんん」

ライアは『五月蠅い』と言いかけたが、いそいで訂正した。

その言葉にウエンは瞳を曇らせた。

「神獣様だったただの獣だもの、1日経ったらそんな些細なことは忘れるわ。狩りはどうなったか知らないけど、蓄えは十分あるし大丈夫でしょう?」

ウエンの少し棘のある言いようにライアは目を丸くした。去って行くこうとするウエンをいそいでライアが引き留めようとしたが、彼女は片手でそれを制した。

「リュシアさん、2人でお話ししましょう」

「…はい」

漂う異様な雰囲気、リュシアは戸惑うのだった。

広場から離れ、少し暗い空き地にウエンはリュシアを連れて行った。

「ごめんなさいね…気分を悪くしたでしょう?それにあなたにまだ玉守様のお話をしていないし…」

ウエンは少し寂しく笑いながら言った。

「大丈夫ですか…?」

あまりにウエンの表情が沈んでいるので、リュシアは心配した。すると、ウエンは慌てて首を横に振る。

「貴方が気にする必要はないの。本当に些細なことなの。あくまで個人的な…」

赤の他人であるリュシアに口を出す余地はないと、ウエンは遠回しに言ったようだ。

「…あまり気に病まないでくださいね。良かったら師匠の話をしてください」

リュシアがそう促すと、ウエンはにっこり笑って話し始めた。

「ありがとう。では始めましょうか」

+++++

私が初めて玉守様と出逢ったのは、まだまだ幼かった頃…。

恐らく50年ほど前だと思えます。ある晴れた日に、玉守様はこの森においでになりました。玉守様は昔ほどここにいらっしやる回数はずいぶん減っていましたが、皆はとても歓迎しました。

幼い私は玉守様によく懐いて、薬草を採るのを手伝ったり、木の実をプレゼントしたり…いつも後ろにくっついていました。

…あの頃はライアも一緒によく遊んだものです。ライアが私をいじめるので…いえ私が鈍臭いからひどく怒られていたのですが、あまりに辛辣なので玉守様にやんわり怒られていました。

意外ですか？…ふふふ…私は貴方を叱るライアを見ると、昔を思い出して懐かしいのですよ。

こんなに幼くて無作法な私達でも、玉守様はめったに叱りませんでした。

玉守様について行って、禁じられている森の出口に近づいて、長に怒られても、玉守様が助けてくださいました。

『私が誘ったのです。彼等は私を手伝おうとしてくれたのですから…いや、実際に色々助かったのです。どうかそこまで彼等を怒らないうでください』

誰よりも綺麗な玉守様にそう言われてしまったのは、長も口出しできませんね…。

竜族が大陸にいた時代はかなり昔なので、竜族の伝説だけ聞いて…少し怖い印象をもっていたんです。

気位高く崇高な存在…なんて、あの怖い長でさえ恐れ多そうに話すのですから。子供にとっては遠すぎて現実味がなかったのです。

でも、玉守様は想像していた竜族とは違いました。…いえ、玉守様だけなのかもしれないですね。昔から、この森を訪れる竜族は玉守様だけなのですから。

確かに玉守様は崇高な存在でした。でも、近寄りがたくはないのです。不思議な輝きを放つ魂が、見るもの全てを惹きつけている…そんな気がします。

玉守様は春いっぱい滞在される予定でしたので、春の終わりに送別の宴を催そうということになりました。私は大人たちに内緒で、森の出口付近に実る、とても美味しい実を採ることを幼なじみたちと計画しました。

人間に見つかるリスクの高い森の出口にいくだなんて、怖いもの知らずでした…。

最初のうちは計画どおりでした。蔓の絡まる中、赤くて美味しそうな実を皆でドキドキしながら採る…こういうことは皆大好きですからかなり熱中しました。

私はライアに誘われて、さらに森の出口に近づいていました。そこにはたくさん実がなっていました。

でも、長居をしすぎました。人間に見つかってしまったのです。人間は、私達には訳の分からない野蛮な言葉を叫びながら矢を飛ばしてきました。

普段から森を駆け回っている私達ですから逃げるのには苦労しませんでした。しかし、私は生えかけていたこの角のせいで蔓に引っかかり…脚を撃たれてしまいました。

仲間達はとつくに逃げていて、そこにはライアと私しかいませんでした。

人間は動けない私に近づいてきました。恐らく、私の毛並みが珍しかったのでしょう。私は恐れと痛みで動けずにいました。

とうとう人間に捕まる！私がそう思ったとき…ライアは人間に飛びついて止めてくれました。

…かなりの乱闘でした…。人間は刃物を持っていましたから、ライアが勝つ見込みはなかったのですが、彼は本気で戦っていました。

しかし刃物には勝てません。ライアが限界に近づいたとき、一族の強者達が助けにきてくれました。

…ライアのおかげで助かったのです。でも一族はライアを責めました…。私はただ白い毛並みをもって生まれただけなのに、大人たちは皆私に気を遣います。

本当はドジで鈍臭い私が、角を引っかけたせいなのに。彼が悪いと皆責め立てました。

玉守様に傷の治療をしてもらう間、私はライアに会えませんでした。玉守様は傷の深いライアの世話をしてくださっていたので、よく彼の様子を聞いたものです。

こんな騒動のせいで、玉守様は滞在を延長されることになってしまったのですが、本当によく私達を治療していただきました。

私は傷が治ったあと、ライアのところに見舞いに行きました。…それからです。誰よりも仲が良かったはずの私達が、なぜか主従の関係になってしまったのは。

多分ライアは私が怪我したのは自分のせいだと、大人たちの話を真に受けて思っているにちがいません。

とてつもなく悲しくて、玉守様に相談しました。玉守様は…

『…恐らく彼は大人たちに貴女を傷つけるなと言われたから貴女の護衛になったわけではないでしょう。これは彼なりの…けじめ…みたいなものでしょう。もう二度と貴女を傷つけないという強い意志の表れです…恐らくね』

そう仰りました…。

夏の中旬になって、とうとう玉守様は出発されました。それから何年かおいて、何度か来てくださいました。昔と変わらない容姿と…笑顔と優しさで。

+++++

「…なんだか余計な話をしてしまいましたね…さっきの口喧嘩で気がおかしくなってしまったようです…あまり玉守様の話ができなくてすみません…」

ウエンは恥ずかしそうに俯いて言った。

「いえ、貴重なお話、ありがとうございました。それと、ライアさんのお話も」

リュシアがそう言うと、ウエンはさらに俯いた。

「お恥ずかしい限りです…聞いても意味ないでしょう？こんな話は…」

リュシアは首を横に振った。

「でも、ライアさんの気持ちがあったような気がしましたよ。ただの怖い人ではないってこと」

するとウエンは小さく頷いた。

「彼はあの事件で人間に対して、すごく警戒してしまうようになったの…。だからリュシアさんには嫌な思いをさせてしまったでしょう?。」

「いえ、警戒の理由さえわかればそこまで嫌とも思いません」

リュシアの言葉でウエンは安堵の微笑みを見せた。

「ありがとう。彼はそこまで冷たい訳ではないの。狩りに行かずに貴女に石器の作り方を教えたのも貴女の為なのよ」

「そうなんですか?…そういえば、ライアさんはウエン様のこと、呼び捨てにして話してましたよ」

リュシアは、このことを話すか一瞬迷ったが、ウエンに話してみることにした。

「…まあ!?!?本当に!?!?…まるであの頃みたい…」

ウエンは目を丸くして驚いた。

「もしかしたら、とっても仲がいいんじゃないんですか?お二人は」

リュシアはウェンに向かって微笑んだ。ウェンはまばたきを繰り返して啞然としてしまった。

「…もし…そうだったら…」

ウェンがなにか言いかけたところで、たくさんの蹄の音がした。

夜の宴が始まる時間なのだ。ウェンとリュシアは再び広場に戻るのだった…。

## PART 4 (後書き)

…すみません本当に

サボって…すみません…

師匠の扱い軽いです

師匠どうしたらいいんでしょう

本当に申し訳ない

更新とろいですが頑張ります…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1726t/>

---

竜玉翡翠伝

2011年11月12日09時20分発行